



お金の使い方

岡山県・岡山県立岡山朝日高等学校 1年 益永 夏帆

高等学校1年生、高校生になって初めてのまちにまった夏休み。私は充実した夏休みとともに、深刻な悩みをかかえていた。——お金がない。いったいどうしたことだろうか、まだ夏休みも半ばにして今後の予定もつまっているというのに。この事態を打開する策はないのか。いや、ある。あの手を使うしかない。「お母さん、お手伝いするからおこづかいちょうだい。」

この作戦は始めてしばらくとてもうまくいったようにみえた。母は家事がへって楽になったと喜んでいたし、私は一人暮らしをする時のための経験として意外にも楽しくとりくめていたからだ。需要と供給のバランスがとれていて、均衡価格であったと言えるだろう。

そんな私にあらたなる刺客が現れる。父の家事への参加と母がパートを始めたということだ。まず父の方から説明しよう。最近仕事からはやく帰ってこられるようになった父が、家事を手伝いだしたのだ。私よりもフットワークが軽く、夜、母に洗う気を失われた哀れな食器たちをさりげなく洗ってあげるといような仕事の出来に私の需要がなくなってしまったのである。さらに父には賃金が発生しないという最大かつ母にとって夢のような条件がついているのだ。私の需要がなくなるのも当然というものである。次に母の方を説明しよう。というのも母は最近パートを始めたのである。家にいるよりも外で働いて役に立ってお金がもらえた方がよいというごもっともな理由である。しかしみなさんはなにが私にとって都合がわるいのか、むしろ母親の稼ぎが増えておこづかいをもらいやすくなったのではと思ったことであろう。私も始めはそう思い、できることを続けていたのだが、その時は急におとずれた。

「そんな仕事にお金は払えないわ。」

母にそう言われたのである。私は少なからずショックを受け、三日余りひきずったが、このままではだめだと立ち上がった。こんな所で負けたままでいる私で

はない。

そこで私は今までの自分の仕事っぷりを思いかえしてみることにした。母に「そんな仕事」と言われたからにはそれなりの理由があるに違いない。ある。ああ、思いあたることがたくさん浮かんできた。洗濯物をとりこんで床に無造作に放りなげていたこと、畳む時にもこれでいいかと適当にしていたことなど。たしかに私が払う側なら嫌だと思った。もっと相手の気持ちに添ったサービスをしなければならない。そこで私はまず洗濯物をきれいにのぼしてから干し、丁寧にとりこみ、母の畳み方やしまう場所にそった畳み方をし、高評価を得ることに成功した。

父にも抵抗しなければならない。その策を練っていると、私のきめこまやかなサービス、相手の気持ちを考えたことが好評だったことを思いだした。たしかに父には賃金が発生せず、さりげなくやってくれるという素晴らしい長所があるが、洗った後、水が散っていたりするなどということがある。ここはビジネスチャンス。相手のかゆい所に手がとどく、それが私の理想のやり方だ。母が帰宅する前に洗濯物を畳みベッドメイキングをすませ、部屋をきれいにしておく、父が帰った時にほかほかのごはんを用意しておく、お風呂を洗ったついでに目が悪い母がみえにくいところを掃除する。結果は上々。前よりも多くもらえるようにさえなった。

しかし私には一つ気になることがあった。母のお金の使い方がずいぶんと変わったのである。私の仕事にお金は払えないといったように母の財布の紐は人目にも明らかに固くなった。お金をもらえるようになったのになぜだろうか。ある日尋ねてみると、母はこう言った。

「久しぶりに社会に出て働いて、働いてお金をもらうことの大変さが身に染みだ。こんなに一生懸命に働いてやっともらえたお金を無駄^{むだ}に使うわけにはいかない。」

とそういうわけだったのだ。「お金をもらうということは大変なことだ、大事によく考えて使いなさい。」とよく言われるし、自分なりによく考えて大事につかっているつもりではある。しかしとはいえ、まだ働いたことのない未熟な女子高生の私には完全には理解し難いのだ。でも今回のことを通してお金について少し学べたような気がする。仕事が終わってうれしそうにビールを飲んでいる父



も、仕事から帰って疲れて眠っている母も、社会という大きな場で懸命に働いて私を養ってくれているのだ。本当に感謝しなければならないと思った。ありがとう。

また今回、父や母という刺客に対抗するため、サービスの価値について考えさせられた。その場しのぎのいい加減なサービスではお金を払ってはもらえない。丁寧な心がこもったサービスでなおかつ相手のことを考えた需要のあるものにしなければならない。自分で一生懸命考えて形にして、人に喜んでもらえる時には、家庭内の小さな家事であろうとも、とてもうれしいものである。社会の中で私も働く日がきたら、私にしかできない、考えられないような付加価値があるものを生みだして、そして父や母のように子供にお金の価値について背中では伝えられるような人になりたいと思った。

